

**水無月** 少し汗ばむ初夏の新緑を送ると、程なく梅雨に入る。和名の水無月、鳴神月、風待月、常夏月などと云ふ名は、舊曆に従つて居るから、今の6月の概念には少しそぐはない。普通、中旬過ぎて梅雨らしくなる。

1939年

## 6月の天象

田植後間も無い早苗も、二三日降り降く雨に、漆黄色い苗代葉が、黒々と力強くなつて、しつかりと大地に根を下ろす。少し都會人には鬱陶しい梅雨も、来るべき秋には、名に背かぬ瑞穂の國を育てる慈雨だと思へば、むしろ感謝の念すら湧いて来る。

**北天から西へ** 北極星を中心に、長く春を飾つて居た北斗も、もう西に廻つて頭を下げて居る。小北斗は丁度上向いて突立つて居る。其の邊には更に龍がクルツト取り巻き、眞東寄りには、ケフェウスが、3—4等星で型を作つて居る。

**西天** 日没の夕焼に混じて、双子を最後にスツカリ冬の星座は沈み去り、續いて、蟹、獅、山猫等春の星座も、西への歩行を早め、次ぎ次ぎと西没して行く。海蛇もいよいよ頭を地平線に突込んでしまつた。

**南に廻つて** 乙女、烏も、共に西南に移動して、もう來月が危つかしい。ケンタウルス狼が南に居るが、人口を引くには低すぎる。たゞ、早目に $\omega$ ケンタウルスの大球状星團を見るのが面白い。然し、是も地平線上僅々十度しか昇らないが、15 cm 以上には壯觀だ。天坪が丁度南中である。

**中天** 寇、牧夫、ヘルクレス、蛇遣と雜種の星座で占めて居る。

**東天** 琴も早や高く、東天白く流れる銀河に副つて、白鳥、鷲、小狐、矢、蛇、と北から並び、最後に射手座でトドメを打つて、賑やかな一連が登場して來た。6月は曇天が多い。然し、時たま、梅雨晴れと呼ばれる日には、今までの霞んだ春の夜と違つて、夜更て高く昇る銀河は、驚く程白く、是等の星座を浸たして、とても澄む場合がある。而も、概してこんな時は、seeingも良好な場合が多い。滅多にはないが、こんな日が火星を迎へて待たれる。

やはり6月の星座も亦美しい。

太陽 月始めには“牡牛”座の中央、月末には“双子”座の中央に移る。簡  
單に表記すれば、

日付	赤經	赤緯	晝間	夜間	夕刻薄明終焉時刻
	時 分 秒	° 分	時間 分	時間 分	時 分
6月 1日	4 31 50	+21°54'	14 21	9 39	8 49
6	52 20	22 32	14 25	9 35	8 53
11	5 12 58	23 0	14 29	9 31	8 57
16	33 43	23 18	14 31	9 29	9 00
21	54 31	23 26	14 31	9 29	9 01
26	6 15 18	23 24	14 31	9 29	9 01
30	31 54	23 15	14 30	9 30	9 01

22日には云ふまでもなく夏至になる。然し、日本の海洋性と梅雨に支へられて居るので、曇雨の限り、内地の気温は割合低く、東北地方以北は未だ寒い日さへもある。然し、北支や満洲では酷暑の候となつて、日中気温は40°Cにも達する。夜間は極めて短かく、明方の最も早い中旬には内地でも3時前に薄明が始まる。

月 月齢13.3の月が“天秤”座に始まり、一周以上して月末には“射手”座に終る。例に依り諸相を略示すれば（月齢、視直径は21<sup>h</sup>の値）

日付	月齢	視直径	時刻	星座	記事
6月 2日	14.3	30' 39"	12 <sup>時</sup>	蛇 遣 ひ	満 月
8	20.3	29 33	8	水 瓶	最 遠
10	22.3	29 44	13	魚	下 弦
17	29.3	32 23	23	オリオン座 牡牛の境目	新 月
20	2.9	32 51	5	蟹	最 近
24	6.9	32 5	14	獅 子	上 弦

水星 月始め“牡牛”座の中部にあつて、太陽に迫り、7日外合を経て夕空に移る。例によつて猛スピードではあるが、概して太陽に近く、観測には不便である。

金星 月始め“羊座”の中部から、“牡牛”座の東端へ、太陽を追跡中。視直径は11.74~10.74へと減少し、光度は今が一番小さくて-3.3である。こゝ暫く、観測には都合が悪い。

火星 いよいよ観測の好機となり、對衝に近付いて來た。月始めには、“山羊”座の西端に居て、23時頃東天に現れ、視直径は15.76、光度は-1.4であ

る。その後餘り動かすに、月末、留を過ぎていよいよ逆行、早や21時頃にはすごく明るい姿を地平線上に現して来る。この頃になると視直径は實に21"、光度は-2.0にまで達して来る。いよいよ観測者は見逃す事の出来ない好機となつて来た。

**木星** 曉天の星。“魚座”の中部に居る。視直径は、34."7~37".8、光度は-1.8~2.0へと増加して、前月よりは少し見易くなつて来た。

**土星** 同じく“魚座”の東端と“羊”座の西端に居る。少し太陽から離れて月末にもなれば一寸見易くなる。視直径は14."8~15".4、光度は+0.7位であるが、太陽の裏を廻つて居る中に、輪の傾が15°にも大きくなつて居るのが楽しみである。

**天王星** 曉天に居るが、太陽に近くて観望不能。

**海王星** 之は宵の星であるが、もう太陽に近くて、同じく観望不能。

**ユリウス星** 6月1日21時が2429396.0に當る。

**彗星** 待望のウインネツケ彗星が、下旬最も近付く。1927年の時に比較すればかなり遠いが、それでも7等級位には達するだらうと思はれる。経過の略圖を示すが、とても早く天空を駆ける。懐しい彗星だ。(観測部月報の222頁を参照)

## 金星の氣體

金星が太陽光線を鏡のように反射する濃い氣體を持つてゐることは大分前から天文學者によつて知られてゐる。金星が明るく輝くのはこのためであるが、それではこの氣體は一體何からできてゐるのだらうか。米國アリゾニヤ州のローウェル観測所のE・D・スリファ、ゼイムス・B・エドソン兩博士によれば、金星の氣體はてうど地球の空氣のように微細な塵埃の分子をたくさん含んでをり、それらの分子が一つ一つ鏡の役目をするのだらう。たとひ水分を含んでゐるとしてもこの結論は變らない。即ち水蒸氣もまた鏡の役目をするから、といふことである。